

Cognition of Ma in Language: A Cognitive Linguistic Approach

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード: 作成者: 向井, 理恵, Mukai, Rie メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/48125

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Cognition of *Ma* in Language: A Cognitive Linguistic Approach

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

言語における「間」の認知：認知言語学的アプローチ

人間文化環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 向井 理恵

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 中村 芳久

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the schema of *Ma* across all contexts. From the standpoint of cognitive linguistics, a schema can be said to be a mode of cognition, which in this particular instance I shall term the “*Ma*-generating mode of cognition,” that can provide a unified account of phenomena that have, to date, been treated from different points of view.

Ma-generating Mode of Cognition (M-mode cognition) is based on the Interactional Mode of Cognition (I-mode cognition) and the Displaced Mode of Cognition (D-mode cognition), as proposed by Nakamura (2004, 2009, 2016a, 2016b). M-mode cognition takes shape when we think of language use itself as dynamic cognition. We sometimes feel that the two modes of cognition are at work simultaneously. That is when we experience the *Ma*-generating mode of cognition. There are three types of M-mode cognition: Transient M-mode cognition, which differentiates the shift from I-mode cognition to D-mode cognition and vice versa, and Lasting M-mode cognition, in which one can experience both modes of cognition alternately. If these states are shared with others, one can feel Intersubjective M-mode cognition, which is the third type.

We deal with paradox, climax, inversion and *kireji* in haiku as examples of Transient M-mode Cognition and analyze oxymorons as an example that crystalizes Lasting M-mode cognition. As an example of Intersubjective M-mode cognition, we examine parodic expressions. We will also explore a story in which we can experience *Ma* in various scenes.

従来の「間」の研究においては、日本の生活や芸術、文化に息づく「間」の研究が多く見られる。南博氏が編集した『間の研究』（1983年発行）には、「生活の間」と「芸術の間」に分けて、さまざまな場面で現れる「間」の記述がある。言語における「間」の研究では、日本語のリズムや拍の計測に基づくような研究が多いが、言葉と言葉の間の計測可能な「間」の研究に終始している。いずれの研究も、「間」とは何かということや、「間」の機能や効果が生じるメカニズムを、それぞれの分野の言葉で個別的に述べているだけで、それら全ての「間」に通じる共通項について述べている研究はないように思われる。それだけに、「間」の定義は一貫しておらず、曖昧であることは否定し得ない。本研究の目的は、言語に現れる、計測不可能な「間」を、認知言語学的に考察することで、そのスキーマとしての、「間」の認知モード（*Ma-generating mode of cognition*）を取り出し、それが、全ての「間」の現象を統一的に説明できることを示す。それによって、それまで曖昧になっていた「間」の本質を明瞭に示すことが可能になると考える。

「間」というと、我々は「もの」と「もの」とのあいだや、言葉と言葉のあいだにある空間的な間隙を想像するが、「間」は、「空間的・静的」なものであるというよりは、むしろ、「時間的・動的」であるほうが本質に近い。「時間的」というのも用心しなければならない。「時間」が、私たちの意識に与える様相にも2つあって、私たちは、何かに夢中になって時の経つのも忘れるような時間を生きることもあれば、今ここではない、「過去」や「未来」を思うことがある。「間」の本質は、前者の「時間」に近いのである。何かに没入して我を忘れるような、生命の迸りとしての動的な時間こそが、あらゆる芸術、文化に息づいている「間」である。しかし、この「間」は、純粋な時間が対象化できないのと同様、捉え難い存在であるので、私たちは、事後的に認識された対象としての「空間」に意識が向かうのである。本来、対象化できない「間」を言葉で語ることには、常にこのようなジレンマが付き纏っているが、木村（2005）の「ノエシス」・「ノエマ」・「メタノエシス」と、中村（2004, 2009, 2016a, 2016b）の「Iモード認知」・「Dモード認知」という述語を導入することで、「間」をより認識レベルに還元し、そのスキーマにアプローチできると考える。

中村（2004, 2009, 2016a, 2016b）は、外界との主客未分のインタラクションを基盤とした、2つの認知モードを導入している。私たち認知主体は、一定の認知能力と行動力によって対象と相互作用しながら、認知像を形成しているが、その認知のようすをモデル化したものが、Iモード認知（*Interactional Mode of Cognition*）である。図1の両向きの二重線矢印は、認知主体Cと何らかの対象との身体的インタラクションを表している。例えば、地球にいる概念化者と太陽との位置的インタラクションなどが想定できる。破線矢印は、視覚や視線の上昇などの認知プロセスを表している。この認知プロセスによって、太陽の上昇といった認知像（四角部分）が構築される。外側の楕円は、認知の場を表す、認知主体Cと同心円になっている。これによって、「認知主体としての私たち自身の境界があいまいであること」と、「私たちと対象とのインタラクションが、私たち（円C）の外部で生じているのか、私たちの内部（楕円の内部で、脳内で）生じているのかがあいまいである」

という認知の実情を捉えることができる、としている。このような認知の実情が、Langacker (1985) の観る・観られ関係を基本とした視点構図からは抜け落ちている、と中村は主張する。

一方、Dモード (Displaced Mode of Cognition) は、認知主体が、対象とインタラクトしながら認知像を構築していることを忘れ、認知の場 (楕円) の外に出て (displaced) 認知像を客観的存在として眺めるような認知のあり方である (図2)。太陽の例で言うと、「日が昇る」という事態がこのDモード認知によるものである。「認知主体は、太陽との位置的インタラクションによって、「日が昇る」という認知像を形成しているのだが、そのような認知の生起している場から出て、あたかも「日が昇る」という客観的自体と対峙して (それを眺めている) いるような気分になっている」ということである。このようなDモード認知は、生活を営む上で一定の有効性を有している。

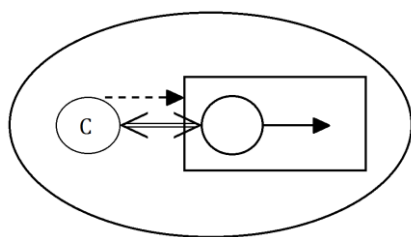


図1 Iモード認知

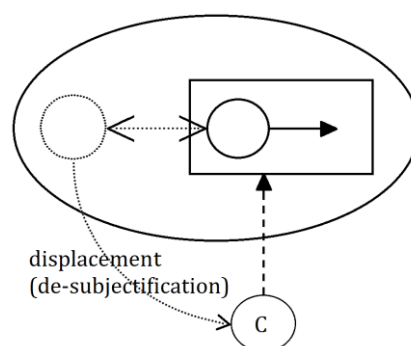


図2 Dモード認知

Mモードは、上記のIモードとDモードの間をダイナミックに動くような認知の在り方であると言えよう。Mモードには、両モード間の瞬間の移りを微分化した「瞬間のMモード」と、両モード間のあいだを行ったり来たりする、「持続のMモード」がある。また、それらの状態が他者と共有されていれば、そこには「間主観的なMモード」が成り立っていると考える。

「瞬間のMモード」はダイナミックな落差や、静かな余韻として感じることができるが、この2つの感じ方は、IモードとDモードのどちらからどちらへの移りであるかの違いである。MモードはIモードと同様に、Dモード認知によって事後的に痕跡として感じることもしかできない。よって、IモードからDモードへの移りの瞬間は、その痕跡がすぐに意識に届くので、ダイナミックな落差として、驚きをもって受容者に感じられる (図3)。一方、DモードからIモードへの移りは、さらにDモード認知によって捉えられないと感じられ

ないので、図4のようにD→I→Dと比較的時間がかかる。これが、静かな余韻として意識に届くのではないだろうか。前者の言語的な現れとしては、逆説法や漸層法などが想定できる。また、俳句に見られる切れ字や体言止めなどは、後者の認知の在り方を内包しており、概念化者の感動を余韻として、受容者に伝える効果がある。

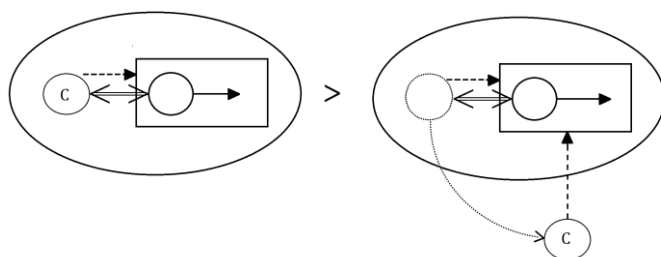


図3 瞬間のMモード (Iモード→Dモード)

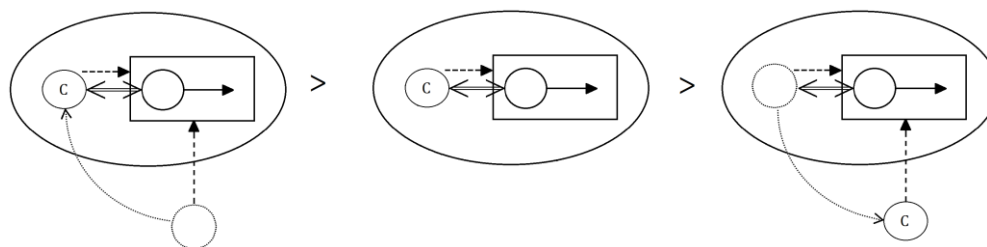


図4 瞬間のMモード (Dモード→Iモード→Dモード)

「持続のMモード」では、二重の主体が存在する。それは、状況内でインタラクションする自己 (Iモード認知) と、それを、より高次のレベルで動かす自己である。音楽演奏においては、前者はその都度の音生成に関わる自己であり、後者は音楽それ自体である。音楽それ自体というのは、本来ノエマ面に位置するはずの、たった今作られたばかりの音楽が、一つの生命のように、その都度の音生成をするノエシス面を動かす、高次のノエシス (メタノエシス) として機能するということである。この第2の主体こそが、主体の中で経験される、自己運動的なメタノエシスとしての「間」の正体なのである。図5では、第2の主体は、破線で囲まれたCとして描かれている。この主体は、Iモード認知をする自己と、Dモード認知をする自己のいわば中間に位置し、どちらの自己にも同化して、どちらの体験も経験できる。いわば、どちらの自己とも主客未分の関係にある自己であると言えよう。

Mモード認知をしているときには、両方の認知の仕方が混在し、リアルともノン・リアルともつかない、虚実入り混じったダイナミックな認知の存在が浮き彫りになる。その動きにこそ、人は生命としての自己を意識するのではないだろうか。このとき、2つの認知モードによって結ぶ像は、ブレンディング (Fauconnier and Turner (2002)) しているといえる。図5の認知像の紫色の部分、ブレンディングによって創発した認知像を表している。ブレンディングにおいては、全体が部分の総和ではなく、新しい構造が創発することが示されるが、その創発構造こそがMモード認知によって結ばれる像、すなわち事後的に捉えられる「間」と言うことができる。「持続のMモード」が結晶化した言語表現として、矛盾した言葉の合成であるオクシモロンを扱った。Dモード認知で結ばれる一つの像では、安定しない自己は、よりしっくりくる像へと概念化者を動かし、新たなインタラクション (Iモード認知) を促す。そのように、概念化者を動かすエネルギーが、オクシモロンには内包されていると考える。

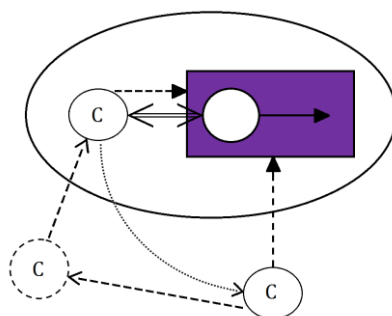


図5 持続のMモード

「間主観的なMモード」の結晶としての言語表現としては、パロディ表現を扱った。パロディはオリジナルの表現を客体視し、それにずらしを入れたもので、そのずれを、他者と共有する目的が顕著に表れる表現である。図6に示すように、各主体のメタノエシスが統合され、大きな動的構造となって、各主体のIモード・Dモード転換を、同じタイミングで動かしている。各主体の個別意識は共通のメタノエシスによって動かされているので一体化した認知の場 (一番外の楕円) で生じ、さらに認知の場から抜け出た各人のDモード認知の意識は、全体意識として、主体間で共有されている。このような状態が、他者との一体感をつくりあげる「間主観的なMモード」である。

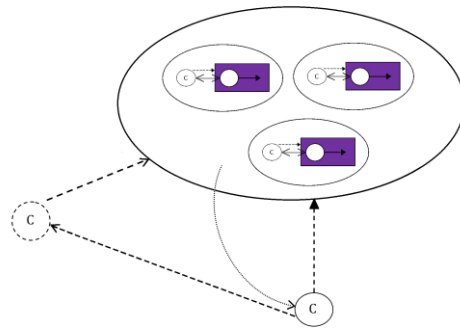


図 6 間主観的な M モード

以上のような言語現象は、ミニマルな M モードであるが、音楽の合奏で演奏者が他の演奏者や聴衆と感じる一体感と同様に、一連の流れの中で経験される M モードの言語的現象としては、音楽演奏しながら、演者が舞台上、聴衆に向けて語りを行うような場面が想定できる。第 7 章では、文字を声を起こす一連の語りにおける M モードの現れを見る。文字を声を起こす語りにおいては、描かれる物語世界だけではなく、現実世界にいる演者、聴衆も物語構成に欠かせない要素となる。物語に内在する語り手と登場人物、現実世界の演者や聴衆が、虚実入り混じった一体感のある舞台をどのように作り上げているかを見た。具体的には、「イントロに入る「間」」、「伏線を感じる「間」」、「セリフと地の文の「間」」、「我に返る「間」」、「クライマックスの「間」」、「エンディングの余韻の「間」」を扱った。

第 8 章では、第 2 章から 7 章において概観した、言語現象に現れる「間」をはじめとするさまざまな「間」の共通項として、「間」のモードが取り出せることを改めて確認し、この「間」のモードの射程について述べ、結びとした。

学位論文審査報告書

平成29年 2月5日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 向井 理恵

2 学位論文題目 (外国語の場合は、和訳を付記すること。)

Cognition of *Ma* in Language: A Cognitive Linguistic Approach

(言語における「間」の認知：認知言語学的アプローチ)

3 審査結果

判定 (いずれかに○印) 合格 ・ 不合格

授与学位 (いずれかに○印) 博士 (社会環境学 ・ 文学 ・ 法学 ・ 経済学 ・ 学術)

4 学位論文審査委員

委員長 中村 芳久

印

委員 堀田 優子

委員 加藤 和夫

委員 西嶋 義憲

委員 武居 渡

委員

委員

(学位論文審査委員全員の審査により判定した。)

5 論文審査の結果の要旨

向井理恵氏の博士論文は、言語あるいは言語使用における「間」を認知言語学の観点から究明することを目的としている。認知言語学は、言語の意味として、言語の表す叙述内容 (content) よりも認知主体の認知の仕方・捉え方 (construal) が決定的であることを明らかにした。例えば、The hill rises gently from the bank of the river. (丘は川の土手のところからなだらかな上りになっている) では、描写されているのは丘の形状であって、rise (上昇) しているもの何もない。そこに動詞 rise が用いられるのは、丘の形状を捉える「認知主体の視線の上昇」という捉え方 (construal) が、動詞 rise の使用を決定づけているためだ、というわけである。主語や直接目的語の文法概念についても、一般には、主語は「誰が何をどうした」の「誰が」(つまり動作主) を表す、という具合で、主語が何を表すか、叙述するかで定義しようとしてきたが、この場合も認知言語学は、主語は、叙述場面の中で「認知主体が一番に目を付けた要素」(trajector) に対応し、直接目的語は「二番目に目を付けた要素」(landmark) に対応する、という規定をする。認知言語学では、このように認知の仕方・捉え方 (construal) の観点から、言語の本質的な側面が明らかにされる。本博士論文は、このような枠組みを方法論とする「間」の研究である。従来の「間」の研究が、日本の生活や芸術、文化に息づく「間」が、なにを表しているか (つまり content) を記述しようとするものであったのに対して、本研究は、どのような認知の仕方・捉え方・認知プロセスが生じているときに「間」が認識されるかを、問題にしている。本研究は、方法論からして革新的なのだが、それによって「間」が何を表しているかを問題にする研究ではたどり着けない、射程の広い「間」の規定を可能にしている。

言語が、使用頻度の高い表現を定着させることは構文文法理論で経験的に明らかにされているが、なにが高頻度を引き起こすかと言えば「間のいい」表現であり、「間のわるい」表現はすたれ「間のいい」表現が生成し残るとすれば、「間」は言語の生成と変化を決定づける重要な要因である。本研究における「間」の、捉え方に基づく規定は以下の通りである。まずわれわれ人間には大きく2つの認知モードがあると想定される。一つは、対象と直接インタラクトしながら対象を捉える認知モード (これを Interactive mode=I モードと呼ぶ) があり、そのIモードでとらえられた認知像を、あたかも客体であるように捉え意識する認知モード (これを Displaced mode=D モードと呼ぶ) という2種類の認知モードである。例えば、太陽の上昇は、認知主体が太陽とインタラクトするところに生じる (Iモードの) 認知像であるが、私た

ちはその認知像をあたかも客観的事態として客体視するところがある (D モード認知)。「間」は、<DモードとIモードの間の行き来の認知様式>であり、その行き来がうまくいっていれば「間がいい」、そうでなければ「間がわるい」ということになる。二つの認知モードの間を行き来する認知様式は「間の認知モード」(英語では *Ma*-generating mode of cognition=M-mode) と呼ばれる。

本研究のテーマの性格上、以下いくつか例を拾いながら二つの認知モード間の行き来の認知様式>としての「間」の<感覚>を提示しておく。例えば、「人類みな兄弟」という標語のパロディーに「ビン類みな頂戴—廃品回収業者」というのがある。パロディーは、認知モード間の行き来 (Mモード) がうまくいかない場合の代表例である。標語の表す、Dモード認知で客体化され常識化された「人類みな兄弟」という社会と、実際に社会と直接インタラクトするときに (Iモード認知で) 見えてくる社会とが、あまりに違いすぎる (つまりDモード認知とIモード認知がスムーズに行き来しない) と、先のパロディー表現が生まれることになる。Dモード認知の表現 (標語) の音調に載せて、Iモード認知のいわば真実を語るわけである。「芸術はすばらしい」というようなありきたりの表現では、間のもたない (Iモード認知が一致しない) 芸術家は「芸術は爆発だ」と叫び、「4月は万物創生の月だ」というDモード認識に、居心地のわるいIモード認識をもつ詩人は「4月は残酷きわまりない月だ」という一行で詩を始めることになる (T. S. Elliot)。詩人は日常言語のDモード認識と詩人自身のIモード認識に「間」の悪さを感じ、異義申し立てをする集団だとも言える。「太陽が地球の周りをまわる」という定着したDモード認知に、間尺の合わさなさを感じる科学者は「地球が太陽の周りをまわるのでは」と考えるようになる。「言語は本能だ」とするDモード認知に、間の悪さを感じる認知言語学者は「言語は習得だ」という観点から言語を明らかにしていく。

世にいうパラダイム・シフト (cf. Thomas Kuhn) にしても、そのシフトによってより真実が見えてくるというよりも、間のわるいDモード認知の世界観が、しばし新たなIモード認知の世界観に置き換わるだけである。クオリア認知が欠如していると言われる哲学的ゾンビは、Dモード認知のみがプログラムされているようなもので、IモードやMモード認知がなく、間を感じるができない。落語でおなじみの「よたろう」や「間抜け」は、文字どおりMモードが抜け落ちているのであり、Dモード認知からIモード認知へと適切に対応づけられないこと・人物である。以上具体例を拾い示したように、本研究のMモードの提案は、まず「間」についての徹底した認知的アプローチであるために、単に一定の言語現象の背後にある認知プロ

セスの解明ということにとどまらず、きわめて射程の広い認知モードの提案(あるいは認識論)になっている。

本論文は、8章からなる。第1章は導入と論文構成の提示で、つづく第2章は、「居間」「客間」などの「間」から「間に合う」の「間」へ、さらに剣術などにおける「間」、能や歌舞伎、俳句、禅における「間」、フッサール現象学におけるメタノエシス概念を援用した、メタノエシスとしての「間」等々について、先行研究のエッセンスを、(もとは日本語で書かれた内容であるが)英語で分かりやすく提示している。「間」を静的なものとしてではなく、ダイナミックな、創造的な<力>として捉えるところが、先行研究にあることを示し、これが後の章の、「間」の認知的分析へつながる。

本論文の中核をなす第3章、第4章、第5章では、われわれ人間が有する2種類の認知モード(IモードとDモード)が丁寧な議論で導入され、単純に2つの認知モードがあるとするだけでは十分ではなく、2つの認知モードの間を行き来する認知様式(Mモード認知)を重視・特記すべきであり、これが言語の営み(あるいはヒトの営み)に強く反映していることを示す。細かな議論の一端を示しておくとして、Iモード認知で生じる認知像(例えば、太陽の上昇)を、Dモード認知が客体化し、太陽の上昇を客観的事実とみなす(少なくとも地動説登場以前はそうだった)。その客観的事実は、次に、またIモード認知に戻って細かく観察されているうちに、太陽の上昇は実は、そう見えているだけであって、認知主体の方が動いているのではないか、というような認識(地動説)にたどり着く。このように、IモードからDモードへ、またDモードからIモードへと、認知モード間を行き来しながら、新たな認識が生まれていく。これがヒトに特徴的な認知の特徴であり、これが(人が生きているということ、集団をなしているということの証であり)言語に反映し、表現形式と意味が生成変化するという議論である。ある作家にとっては、作家業は「苦楽し」(くるたのしい)らしい。作家業を「楽しい」とか「苦しい」とかありきたりの形容をする作家もいるが、その作家が作家業をIモードでじかに経験したところからすると、「苦楽し」としか表現できないということであり、ここにもDモードからIモード、そしてまたDモードへと認知モード間の行き来(Mモード)があり、そこに新たな表現が生まれている。「やばい」という表現が<美味しいケーキ>に適用されて「特段に美味しい」を意味するようになるのも、DモードからIモード、そこからまたDモードへとこの認知の行き来(Mモード認知)による。この論文の中核部分では、「苦楽し」に類する修辭的なオキシモロン(撞着語法)に、Mモードがどのように反映するのか、より広範な認知

言語学の観点から、説得的に論じられている。

第6章、第7章では、Mモード認知のメカニズムをより詳細に論じながら、また説明の対象となる言語データを増やししながら、Mモード認知の言語への反映がより普遍的であることを論じている。第8章は、まとめと今後の課題と展望である。

以上が、本論文の核心部分と論文構成の概略であるが、とりわけ次の2点で本研究は高く評価される。一つは、「間」へのアプローチが徹底して認知的観点からのものであるという点であり、もう一点は、日本語、日本文化に関する認知言語学的研究で、IモードやDモードに類する認知様式を別々に導入する研究は多く認められるが、認知モード間の行き来（Mモード）を想定し、それが日本語や日本文化の「間」の概念に反映していることを示し、その更なる適用可能性をも示唆する端緒となる研究だという点である。Mモード、あるいはそれに類する認知様式の、特に言語とヒトにとっての意義に関する議論が活発になるであろうことが十分予想される。本研究は、認知言語学の中核にある認知文法理論の認知モデルに修正を迫るものであり、また世界を理解するための知の多様化に深く寄与する研究になっている。

しかし本論文には問題がないわけではなく、複数の審査委員から指摘があったように、英語による提示の問題がある。先行研究の内容紹介の段階では非常にうまく提示されているが、独自の議論展開の際に、英語で十分意が尽くされていない。ただし、この点は、今後考察を深め、馴らし、とりわけ英語表現の難しい内容の表現スキルを意識的に磨くことによって、十分克服可能であり、独創性豊かな本論文の価値をそこなうものではないと判断される。おそらくこのレベルであれば、英語表現のスキルを磨くことが、考察を深めることに直結していると思われる。以上のような審査を経、審査委員会は全員一致で、本論文が博士学位論文の水準に十分達していると評価し、合格と判定した。